

# OPINION

中部経済新聞

日本・トルコ経済フォーラムは2009年、より深い経済関係を構築するために設立され、双方の企業が技術、グリーンエネルギー、建設に焦点を当てた新しい産業分野や機会を探求することを可能にしている。近年、両国は持続

## 「ナビゲーター」

可能な開発に重点を置き、環境に優しい技術、スマートシティ構想、建設プロジェクトにおける合併事業、技術革新に力を入れている(第1から第3ポスボラス大橋の改修や建設、またポスボラス海峡トンネルの建設で日本企業が主体となったのはあまりにも著

# 日本への期待 世界各地から

其 117

# 日本との協力から変革まで

名、訳注。

産業分野での協働と並んで、文化交流も二国間関係を豊かにし、相互尊重と理解に基づきより強い絆を強化している。トルコと日本の文化を称えるイベントは、人的交流の強化をとおして産業分野の協働を強化している。

現在の流れと課題を考慮すると、さらなる協働のための可能性を秘める新たな分野がある。これらは新しい形のエネルギー、リサイクルやエネルギーを含む持続可能性、AI、VR(仮想現実)、AR

## トルコから(下)

(拡張現実)、インダストリー4.0などで、デジタル化や新しい交通手段やインフラ、地震への備え、新しい都市設計や開発などである。

一方、ニーズと現在の風潮からは、強じん性(レジリエンス)、リスク管理、在宅勤務やハイブリッド勤務を含む新しい働き方、ロボットの活用、環境変化への機敏性(アジリティ)といった新たな検討領域で変革のために、組織を開発、改善して適応させる必要がある。時代の流れは、組織の発展や適応と

ともに変化への寛容さ、柔軟性、創造性、革新性、革新的な思考を包含する適切な文化の必要性を高める。文化や変革的リーダーシップにおいて、適切な側面や特徴なしには、いかなる変革の試みも成功しないだろう。

ローチを非常にうまく融合させ、消化してきた。プリサ、トヨタ紡織などトルコの日系合併企業数社が国際的な賞を受賞して、サクセスストーリーを生み出している。朝会、現場、トヨタ生産方式、5S(6S)、カイゼン、方針管理などの日本の産業文化の側面を日常生活の一部にして

トルコは地理的な意味だけでなく文化的、産業的な観点からも東洋と西洋の架け橋である。トルコ産業界は、日本からの継続的な改善文化と、相互利益に根ざす生産的なパートナーシップを培うことができるかを証明している。両国がグローバル経済のさまざまな課題を乗り越えていくに

あたって、協力、革新、文化交流を確実にすることで、産業分野関係で継続的な成功を収めることを確固たるものとなる。今後、技術移転、持続的な発展、貿易関係の強化に焦点を当てることで、両国の協働関係の次の展開が明確に定義づけられるだろう。

【セラル・セフキン、リーム中産連】

投稿者は、トルコ品質協会や欧州品質管理財団(EFQM)に勤務し、EFQMモデルの開発に貢献、世界各国で多数の組織アセスメントを主導、アセツサーやトレーナーを育成した。

(月曜日に掲載)